

2021岡山市芸術祭

岡山市民の文芸

第53回岡山市民文芸祭受賞作品

一般の部

【現代詩】

◎岡山市長賞

和箆笥の中は

森本恭子

和箆笥の底の新聞紙を入れ替えようと
引き出しを上から順に開けて
着物やシャツをすべて取り出した
底に敷き詰められて茶色く変色した
古い元号の新聞紙が現れる

私は独り 無言のまま作業する
一枚剥ぐたびに 桐の木本来の匂いと
湿気を吸った古い紙の匂いが立ち上る
今日まで自分の持ち場にいた新聞は
真新しい パリッとした紙とは違う
半ば朽ちかけた手触りがいいらしい

見開きの新聞を両手で引き出す
廃棄される日に浴びる久しぶりの陽光
運命の日が来たね 今までお疲れさま
慎重に優しくしわをのばして畳む
強く触れると破れるほどもろいから

目を落とすと懐かしい広告が飛び込む
その頃 有名だった単行本で
夢中になって読んだ記憶が蘇る
痕跡として残る宣伝文句の数々は
やがて私の想像力をかき立て
じんわりと胸が熱くなる

手元の新聞と時を共有した私は
束の間のひと時 その中をさ迷う
剥がれ落ちてゆく思い出や
こぼれ出てしまう喜びや悲しみに
自分の青春時代が美化されないことに
いささかがっかりしながら

箆笥の中で密かに呼吸し続けた衣装に
冷え込んだ六畳部屋の空気が入り込む
今日の新聞を何年か後に取り出す日
少し背伸びしていた私が懐かしいかしら
指先に箆笥の匂いがしみてくる
ようやくすべての入れ替えが完了した
ふと 誰かに話しかけたくなった

楽しい頭

久山順子

必死で覚えた カタカナ語
横を向いたら もう消えている
一字違えば 意味まで違う
知ったかぶりで 笑いが取れる
楽しい頭に なっていく

大事なもの だからなくしちゃ大変と
思って仕舞ったことまでも 覚えてる
なのに分からぬ 仕舞い先
プレイバック、プレイバック
楽しい頭に なるもんだ

ほれ、あの人 人となりも顔も
分かるのに 名前がトンと出て来ない
諦めた頃 脈絡もなく湧いて出る
いらいら、ゆっくり 会話は続く
どうなってるのやら 楽しい頭

昨日出来たことが 今日はどう出来ぬ
不思議なことが あるものと
頭の中を 覗いて驚いた
老化と劣化で 目詰まりした
脳フィルターが 醸す楽しい頭

子供の頃から 何気なく見ていた老人に
いつの間にか なっている
誰もがなれると 限らない老人に
なれただけでも ありがたい
なれたからこそ経験出来る 楽しい頭

見るとなるのは大違い 初めてする老人
よたよた、もたもたは 当たり前
何でこうなるの の失敗をする
失敗は嘆かず 笑えば楽しめる
楽しい頭に 乾杯を

楽しい頭は 退化じゃなくて進化の証
命のある限り 人は進化する

味わう

岡

由美子

さあ 何から召しあがりますか
看護師の声かけに
食べたい食器を指さす
気管切開して 声の出ない私の伝達手段は
ジェスチャーと筆談のみ
二か月間 経管栄養をしているうちに
嚥下機能が 大きく低下してしまつた
誰よりも 食欲旺盛な私だつたけれど……
ミキサー食の小匙一杯を 口に入れてもらう
舌の上で転がし 献立表から探り当てる
白いのはお粥
サーモンピンクは 鮭のバター焼き
黄土色は かぼちやの含め煮
モスグリーンは 小松菜の和え物
黄緑は キャベツと胡瓜のサラダ
食材の姿は とどめていないが
味覚で 何の献立かが解る
「味わう」喜びを かみしめる

介護職だつた八年間が 頭をよぎる
高齢者の食事介助には 毎日携わつた
ペースト状のミキサー食が
何の献立なのか 考えたことはなかつた
ひたすら 気を遣つたのは
喉に詰まらせないこと
せかさないうこと
少しでも多く 食べていただくこと
事故がないように
時間内に終えられるように
それらを 第一目標にしていた
「味わう」ということの大切さには
気がつかなかつた……

みごとに完食されましたね
看護師が わが事のように喜んでくれる
私は手を合わせ 頭を下げる
相手を思い遣る食事介助への感謝と
一口ひとくちを
味わいながら食べられたことへの
感謝をこめて

この世で一番

山本照子

この世で一番広いものは
心だと聞いたことがある

小学五年生の時の国語の時間

その日の作文の題は「母」

鉛筆を持つとうとしない私の傍らで先生は言う

「思い出でもいいんだよ」

しかし物心がついた頃には

母はこの世の人ではなかった

わが家に帰って目にしたもののは

お握りをむすんでいる父の背中

陽の光をたっぷり浴びた布団のように

温かくて広い

「何かあったのか」

ふりむきざまに父は言う

たちまち私は父の心にすっぽりと包まれる

眠れない夜が続いて寄る辺のない私の体温が

夫との諍いを巻き起こす

自分の部屋に閉じこもった私は

吉野弘の詩集を手取る

そのなかの「祝婚歌」の一節一節が

五臓六腑に染みわたる

三度読み終えた時には

私は凧いだ海に浮かんで微風と戯れている

時空を越えて

私を波打ち際まで運んでくれた

吉野弘の想い

私は私の心で

人の想いをどれほど汲んできただろうか

翼を大きく大きくはばたかせただろうか

宇宙を確と抱きしめただろうか

初秋の青空は

静脈を流れる

血の音とさえも響きあうかのように

深く深く澄んでいる

その青空に両手をつっ込んで深呼吸した心が

果てしなく広がっていく

やいご

田房正子

「さいご どうなるんだろう」と 私の母にぎやかな食卓には不似合いなほどの静かな口調に みんなの箸を持つ手が止まる「それはもう びっくりするくらい垢ぬけて仕事も恋も手に入れるに決まっているって」私は とっさに

いつも母と見ているドラマの結末予想をした「ドラマ見るにも暑いわ この部屋」と長女「エアコン 寿命なんじゃない？」と次女娘たちは リビングのエアコンの寿命予想「いやいや 熱くなるぞ 今年こそ優勝」夫は ひいきの野球チームの優勝予想 会話は キャッチボールとは ほど遠くへたくそなパス回しで 迷走し 立て直すのに四苦八苦する

母が もしかしたら 自分のさいごを思い浮かべて つぶやいたのではないかと 私たちは 勝手に想像し 勝手に動揺するひととき 食べて 喋って 夕食が終わり「おやすみ」と 夫は 一足先に席を立つ さて そこからは いつもの女子会 母が言う

「ところで さっきの話だけど」 私にも 娘たちにも 緊張が走る

「さいご 二月だって あの雑貨屋さん 閉店するらしいよ」 さっきの「さいご」は このことだったか 「セールするかもね」

「いいね 女子だけで 買い物行こう」 世代をこえても 女子の集まりは楽しく弾む

洗い物や片付けや 明日の下ごしらえを終え家の中が静かになると 耳を澄ませる 母の部屋から聞こえる 新聞をめくる音 料理番組を見ながら うんうんと頷く声 戸の隙間から ほのかにもれる灯り そんなものを 全部寄せ集めて 安心をする また明日も あさつても ずっと こんな時間が こんな日々が続きますように 「さいご」まで

【短歌】

◎岡山市長賞

亡き姑の愛した一つ藤袴絶やさず育て供華に切るなり

佐藤 恭子

◇岡山市教育委員会教育長賞

乗客の視線あつめるバスのなか盲導犬のかほはやさしい

前原 和子

量販店に丸型掃除ロボットは客を避けつつ仕事続ける

岩本 喜代子

独り居の知人の厨に灯のともる小さくも確かな暮らしのあかり

新居 明子

イケメンの話になるとオクターブ声跳ね上がる八十の青春

長森 正子

【俳句】

◎岡山市長賞

山並みの抱き寄せにくる帰省かな

石川 眞一

◇岡山市教育委員会教育長賞

二階へと猫を片手に遠花火

富士山 友実

くちびるに喃語あふるる五月かな

信安 淳子

柔らかき絵筆で描く春の海

本城 佳舟

産院の仄かな明かり木の芽雨

貝畑 信行

【川柳】

◎岡山市長賞

感涙も挫折の汗も知るタオル

永見 心咲

◇岡山市教育委員会教育長賞

ダイアナを聞いてカットの番を待つ

片山 幾子

風鈴と打ち水我が家のSDGs

平元 薫

いつの日かお洒落マスクを供養する

長島 恵美子

定命が分かれば困るかも知れず

久山 順子

【随筆】

◎岡山市長賞

花束

久山 順子

誰の目も届かない奥まった所に庭がある。紫陽花が色づき出す頃になると、この美しい花を一人で眺めるのはもったいないと、私の血が騒ぎ出す。そこで通りに面した家の軒先を借りて、自由に持つて帰れる花束を、バケツに入れて置く案を思いついた。もう、20年は続いているだろうか。紫陽花の咲く頃、一ヶ月間ほど現れる、風物詩のようなもの。

このところの、何ともやるせないコロナの憂鬱を、少しでもこの花束で、癒やしてもらえたらとの思いを込めて、今年のキャッチコピー『コロナ禍、お花をどうぞ』の言葉を添えた札をバケツに掛けた。一日20束ほどの花束。

始めた頃は道を行く人の目に止まって、足を止めても、このご時世、こんな奇特、黙って貰って行ってもいいのだろうかと思う、半信半疑の朝の三文の得の遭遇であったが、今では施主不明の花束にも馴れ、紫陽花の花束のバケツの季節到来を、心待ちにしているファンが出来たことは、最上の喜びである。

早朝の涼しい内に、庭に出る。花束になりそうな咲き具合の紫陽花と、その組み合わせの花材を調達して、少しでも長持ちするように、心を込めて水揚げをする。珍しさから購入したものや挿し木で増やした紫陽花、種類も色も様々。ギボウシ、ホタルブクロ、縞ススキ、カキツバタ、半夏生、藪カンゾウなどを組み合わせて、私流の感性で作る花束に、同じものは一つもない。どんな人に貰われるのかなと、わくわくしながら花束を作る。

路地奥の炊事場の窓から、置いてある花束が少しだけ見える。花の好みはみんな違って上にある、持つて行くときの行動が、また面白い。正直に一つの人。気に入ったものを手に持ち、次を手にしてどちらかに決め難くて、両方とも持つて行く人。あの人は3束も持つて行ったが、友だちに上げる分よね。障子に目があるわけじゃなし、私もズルするかも。美し過ぎる花束の罪にしておこう。

もう、仕事のない独居老人ではあっても、早朝の2時間は貴重な時間である。「よう、そんなアホらしいことを、するんじゃあ」と言う人、「そんな、間があったら、寝てる方が、得」と言う人。今日も誰かが持つて行って下さって、空になったバケツを提げて帰る快感、人それぞれ。「ありがとう」のメモが添えてあったりすれば、また頑張れる。

81歳の健康体、花束に出来る花が咲いて、貰って下さる人がいて、軒先を貸してもらえらるから成り立つ、ありがたい「花バケツ」なのである。去年は663束、今年は801の花束を置くことが出来た。今年もめでたく無事に終了。

酷暑が続く、花たちは水を欲しがる。アンタらより老婆の命の方が大切よと思うが、美しく咲いた花だけが花ではなく、来年の花の準備を、花たちはもう、すでに始めている。私も老体にムチ打って、水道りと草抜きに励んでいる。気力と体力が要る花束作り、来年も、道行く人々に喜んでもらえたら、いいなあ。来年の話をしたら、鬼が笑うとか。

きぼう

西崎良子

「きぼう」を観ました。国際宇宙ステーションISSの「きぼう」です。その瞬間を、うろろう、そわそわ待ち、ドキドキ夜空を見上げたのは、二十四年前のヘルポップ彗星以来のことでした。

「きぼう」が六月一日の夜に、日本上空を通過することを知ったのは、前日のテレビニュースでした。アウンサーは、この地区なら何時何分、この方向にと、詳しく伝えていた。そして、その「きぼう」には、日本人宇宙飛行士の星出さんが、ISS船長として搭乗している、ということも。

天候を心配していたが、当日は、朝からよく晴れていた。岡山で観ることの出来る時間は、二十時五十一分だ。何度も、時間と方角を確認して、日の暮れるのを待った。

懐中電灯だけ持って、二十時二十分に出発した。五、六分歩いて目的地に到着。ここは、草だらけの狭い空間だが、空を見上げる場所。誰も知らない私だけの否、私と愛犬クロだけの秘密の場所なのだ。クロは、もういないが、ここでヘルポップ彗星の感動を共有した。

初めて観る青く美しい彗星に、思わず「おお」と、クロを抱き寄せた遠い日。一九九七年四月の、夜明け前のことだ。

五分前、あと五分。思い出に浸っている時間はない。日没の遅い六月だが、周囲の薄明も消え、星を待つばかりの空の色だ。息を止め、北東の空を凝視する。見逃しはないかと、まばたきすら躊躇してしまう。風が、遠慮がちに通り返ってきた。

予定の時刻は、既に過ぎようとしているが、何も見えない。期待に満ちた夜空は、尚も無言を貫いている。大切な一秒が、心臓の音に重なりながら、どんどん消えてゆく。高まる期待が、時間と共に溜息に変わってゆく。それでも諦め切れずに、夜空を見上げ続けた。

登場に前触れはなかった。「きぼう」は、突然に現れた。小さな光の点が、次第に近づくのをイメージしていた私は、慌てて足下がふらついた。転んではならぬ、眼を離してはならぬ。見逃してなるものかと、体勢を立て直して光を追った。

想像よりも大きな星の輝きだ。北東の空に突如現れた「きぼう」は、ゆっくりと天空を移動している。あの光の中から、星出さんが地球を見守っているのだ。思わず背伸びして手を振った。見知らぬ人にも「星出さんが乗っているのですよ」と叫びたかった。

至福の時とは、束の間のことを言うのだろうか。突然現れた「きぼう」は、突然に消えた。息を止めて追っていた光が、中天で消えてしまった。雲に隠れたのだろうと、再び現れるのを待つこと五分、十分…。しかし夜空は、そのまま終了してしまったのだ。遠去かる「きぼう」を見送るはずだったが…。

余韻残る夜空から地上に戻るには、深呼吸と、少しだけ時間が必要だった。さあクロよ、そろそろお家に帰ろうか。

かみかくし

大森 博 巳

その日、夫が、名古屋の「味噌煮込みうどん」を食べようといいだした。

食欲をそそるパッケージの写真ではなく、消費期限が近づいていることに気付いたからである。ならば、というどりやバランスを考えつつ、ニンジンや椎茸、カマボコ、たまご、などを冷蔵庫から取り出した。それらを見て、夫は牛肉とネギを忘れるな、という。あわてて冷凍していた赤身の牛肉を電子レンジに入れ、解凍スイッチを押す。

そこまで準備をしたところで、屋外に保存しているネギを取りに出た。段取りの悪さに我ながらあきれつつ、農家さんからいただいた自慢のネギの束の中から何本か選んだ。

ようやく材料が揃ったところで小さな鍋を二つ用意した。火の通りにくい野菜はあらかじめ入れ、沸騰してきたところに生うどんを投入する。説明書通り、うどんが半ば茹だったところに残りの具材を入れる。

「よし！牛肉だ」と振り返ったところ、あるはずのものがなかった。解凍した二百グラムの肉が忽然と消えていたのである。

そこに夫がやってきた。

「置いていたはずのお肉が消えたのよ。カマボコ多めでいい？」

さりげなく聞いたが納得してくれない。そして、本当に牛肉があったのか、と疑う。そりやそうだ。わたしだって疑いたくなる。言い訳も小声だ。

「固そうな赤身のお肉だわ、と解凍したんだから…。ピーちゃんかなあ」

ピーちゃん、とは四歳の雄の飼い猫である。それまでに、何度も窃盗未遂事件おこしている。かつお節パックなど不用意に置こうものなら、くわえ去る。味付け海苔も油断禁物だ。ネギを取りに外に出た隙にネコババしたのだろうか。ただ、そういう時は、どこか後ろめたい表情であり、ペロペロと舌なめずりをし、念入りの毛づくろいをしている。ところが、そんな素振りを見せていない。

神隠し？

それでも、つくりかけのうどんは完成させなければならない。火加減を調整しつつ、猫が引きずりこみそうな場所をのぞきまわる。赤い牛肉はマボロシだったのだろうか…。うろたえる飼い主を尻目に主犯とめぼしをつけている猫はくつろいでいる。一匹には多すぎる分量だ。共謀犯もいるはずだ。犯人だとすると、猫たちはアカデミー賞ものの名演技である。あきらめかけていたとき

「あった！」

夫が声をあげた。ラップに包まれたまま、電子レンジの横のすき間に落ちていたのだ。

猫の歯型も爪痕もついていなかった。あやうく冤罪をまねき、ゴハン抜きに処するところだった。詫びる飼い主に猫は知らん顔だ。理不尽な疑いを辛がる様子もない。

てんでに丸まっている姿を見ながら、いつもより静かにすすったうどんは、すっかり煮詰まっていた。

幸せのかたまり

栗原 由美

コロナ禍で随分と会っていない友人にやっと会えた。それまでは年に一度は、福山から電車に乗ってやって来ていた。「チケットが当たったのよ」と私の分もちゃんと用意してくれて、歌舞伎も観たし、コンサートも美術館へも度々足を運んだ。

そして今回は手芸の大好きな彼女が見たかった、キルト作家蜷川宏子と蜷川実花の二人展のチケットを持ってやって来た。

「やっとこれだ」改札を抜けて近づいて来る彼女の変わらない笑顔に安心した。

会場に入ると一度に華やかな世界に包まれた。実花さんの大型写真パネルは華やかという形容がぴったりである。淡い色彩を好む私でも、鮮やかな色合いに心踊らされ、元気をもらった。お母さんの宏子さんのキルトもパネル同様大作で、特に懐かしいと感じられる布を使ったものに心が奪われた。細やかな手作業に思わず「すごい」と連発していた。今回誘われていなかったら出会えなかった世界に、連れて行ってもらえて本当に良かった。

満足して会場を後にし、店舗の並ぶ一角で飛沫防止パーテーション越しにコーヒーを飲んだ。二人展の話で盛り上がった。「簡単そうなのは作れるかなあ」と意欲を示すと「簡単に出来るよ」と彼女はペンを取り出した。トレイに敷いてある紙ナプキンに円を描き、縫い目を印して、縫って絞って繋げていくだけで、ひとつの作品になると教えてくれた。

そして私達は次の目的地に移動しようと席を立った。ペンを取り出した時、彼女のバッグから何かが落ち金属音がしたので、再度、捜したけれど見つからなかった。最初に支払う時、私の分も一緒に払ってくれたので、後で渡した五百円玉をそのまま彼女はバッグの脇ポケットに入れた。それが落ちたようだった。転がりもせず、テーブルの土台の下に入り込んでしまったようだ。「まあこんなこともあるわ」と言いながら駐車場に戻った。支払い機の前には、故障なのか作業をしている人達がいた。駐車券を渡すと「料金はいいですから」と言われた。

「これってさつき落とした五百円玉と繋がっているよね」

二人で顔を見合わせて、笑いをこらえることが出来ないほどのテンションになった。たった五百円のことなのに面白がらずにはいられなかった。

もう一カ所美術館を巡り終え、今流行りのカフェのデザートを食べながら彼女が言った。

「幸せのかけらを取り出すといいんだって」心の中から忘れていたかけら、埋もれているかけら、それはその人にしか取り出せないものだ。幸せな出来事、瞬間、場面は思い出せば数限りなくあるはずだ。

「今これも幸せのかけらになるね」ふわっふわのパンケーキを口に運びながら言う

「これは幸せのかたまりよ」と彼女は笑った。

後日彼女からキルトキットが送られてきた。

「幸せのかたまり」となって。

彼は恐竜

二土山 郁乃

彼は私の最初の勤め先に居た。

社会人とは名ばかりで職場ではどこか自分を仮置きしているようなぎこちない毎日の中で、彼は唯一心うちとけられる存在だった。彼の魅力は何といつてもその風貌にある。長く伸びた首と背中の中のゆるやかな丸み。尾は流れるような曲線を描き、体に比べて小さすぎる頭でどこか笑っているような切れ長の目は優しい。巨体ながらも威圧感がないのは、彼が誰とも親しくなりたいという気持を全身から発しているからだろう。とりわけ彼は子ども達に愛され、その歓声に囲まれる彼は羨ましいほど幸せそうだった。

昼の休み時間に余裕があれば、彼に話し相手になってもらった。もっぱら彼は聞き役だ。日々のつたない失敗やささやかな進歩。「やりたいこと」はまだ見えず、どこに向かうか分からない自分の人生の地図は白紙という不安。とりとめのない私の話に、彼は静かに耳を傾け、いつも最後にこう言った。

「人にはそれぞれの役割があるさ。」

程なく短い任用期間を終え、私は彼といた場所を離れた。年末の慌ただしさの中で次の職場へと向かったので、彼と別れを惜しむ時はなかったが、彼の言葉はいつもどこかで私を励まし続けてくれた。

その後長い勤めの明け暮れを経て、あの頃白紙だった地図には自分なりの道が書き込まれていた。地図もそろそろ仕上げにかかろうかという頃、偶然私は彼といた場所を訪ねる機会を得た。彼はまだそこに居るのだろうか？建物は新しくなり様子が変わったと聞く。もしかすると彼も去っているのではないか？

ためらいながらも訪ねると、はたして彼の姿はそこにあった。一新された周囲の景色に決して引けをとらず、むしろ前以上に堂々とした雄姿に見える。かつての友が立派になっっているのは何より誇らしく嬉しい。彼をとり囲む子ども達の歓声もあの頃と同じだ。私は彼に呼びかける。

「幸せそうだね。」

「ありがとう。君は？」

彼の問いかけに、少し考えそして答えた。

「もちろん。」

それから時折に彼のもとを訪ねては、いろいろな話をした。別れてからの旅の数々。その途中の様々な出会い。知り得たいくつもの喜びや哀しみ。彼は相変わらず静かに聞いてくれる。その目は子ども達に向けられる時と同じように優しい。

彼はずっと待っていてくれる。変わらない強さと変わらない哀しさを抱えながら、もう帰ってこない仲間やかつての友だち、そしてこれからの友だちも。いつかすべての「役割」が終わったら彼に報告に行こう。その時に褒めてもらえるように、しっかりと地図を仕上げよう。

彼は恐竜。京山の麓のサイピア・太陽の丘公園で、長い首で空の彼方を見上げながら、今日も友だちが来るのを待っている。